

かざ

ぐるま

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2022 春号

98

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集 尼寺観音寺跡の発掘調査

鳩羽山と発掘調査地をのぞむ（南上空から）

特集 尼寺観音寺跡の発掘調査

はじめに

あまてらかんの人じあと
尼寺観音寺跡は、紀の川市貴志川町尼寺地区の、東西約300m、南北約200mの範囲にある遺跡で、貴志川支流である丸田川北岸の台地上に所在しています。今回の調査地はこの台地の突端部にあり、遺跡の北辺にあたります。この遺跡はこれまで発掘調査は行われていませんが、周辺で奈良時代の軒丸瓦が採集されており、現在の観音寺の北にあたるため、古代寺院関連の遺構や遺物の新発見が期待されていました。

本遺跡の北東に、奈良時代前期（白鳳時代）の寺院である、北山廃寺跡があります。この遺跡は瓦窯3基、瓦製作に伴う粘土採掘坑や多くの古代瓦などの出土遺物とともに、古代寺院の塔跡なども明らかになっています。

西方の、鳩羽山（標高265m）の南麓に岸宮祭祀遺跡が存在しています。この遺跡では奈良時代から鎌倉時代の環状配石遺構や敷石遺構、井戸遺構などの祭祀遺構が発見され、

わきょう たぐがた
和鏡・鐸形銅製品・魚形銅器・滑石製有孔石製品などが出土しました。鳩羽山頂近くにある「たてり岩」から山麓の岸宮八幡神社に至る地域に、祭りの場が時代によって変遷していく過程を示した複合遺跡です。

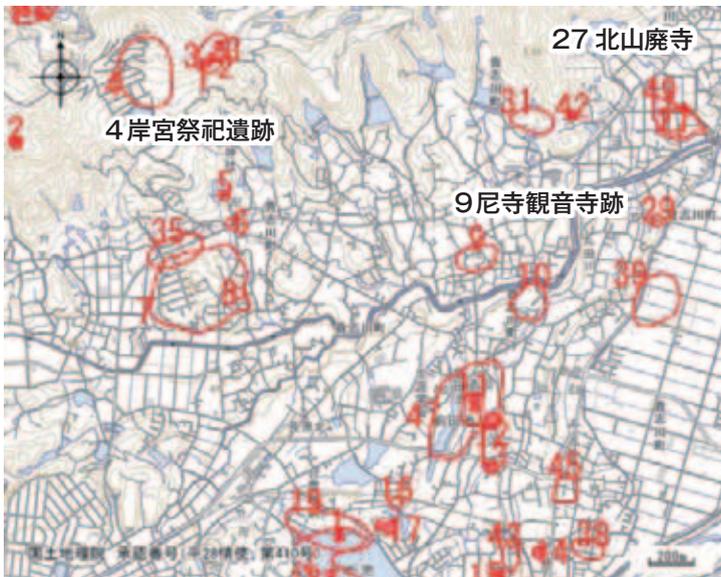


図1 尼寺観音寺跡と周辺遺跡地図
(和歌山県埋蔵文化財包蔵地所地図より転載)

調査成果

今回の発掘調査は、県営中山間総合整備事業尼寺地区ほ場整備事業に伴い、東側の調査区を第1調査区、西側の調査区を第2調査区として実施しました。今回の調査区における基本層序は、第1層が現代の水田耕作土、第2層が鉄分・マンガン粒を多く含む現代の水



写真1 尼寺観音寺跡発掘調査全景（西上空から）



写真2 第1調査区 全景 微高地検出状況（北から）

田床土、第3層が、径1〜5cmほどの礫や粗砂が混じり、中世土器などを含む中世の遺物包含層です。中世以降の土器を多く含んでいることから、その下層である第4層の耕作地を埋めた中世の造成土と考えられます。第4層は径1〜3cmの礫や細砂、マンガン粒が混じる耕作土です。この層の下、第5層上面では畦畔（あぜ）が発見されました。（写真3）幅0.4〜0.6mの畦畔と畦畔の間は2.8〜3.5m前後

の間隔があります。中世土器を多く含むことから中世段階でつくられた水田と考えられます。第5層は、遺物の出土が見られず、人間の手が加わっていない地山層です。この第5層上面で中世以降の生活痕跡（遺構）が確認されました。第1調査区は標高39mで地山面が、第2調査区は標高40mほどで遺構面が見つかっています。

第1・2調査区ともに、北から南に向かって傾斜し、第1調査区においては北西から南東に流れる自然流路によって地山面が削られて形成された微高地を確認しました。

第1調査区の成果

中世段階に地山面を造成した耕作地を確認しましたが、その他の遺構は確認できませんでした。自然地形としては、調査区の北西において北西から南東に流れる自然流路で削られた微高地を確認しました。（写真2）

遺物 造成土と耕作土から中世の土師器や瓦などが出土しています。自然流路の砂礫を含むシルト層から、弥生時代後期末から古墳時代初頭の土師器片も見つかっています。



写真3 第2調査区 南壁土層断面（造成土と耕作土）

第2調査区の成果

中世以降の掘立柱建物跡2棟と柱穴群、中世の土坑、近世の溝や土坑などを発見しました。

掘立柱建物1 調査区北側にある、2間×2間の掘立柱建物です。柱間は、桁行で1.5〜2.5m、梁行で1.0〜2.0m、柱穴の直径は0.3〜0.4m、深さ0.15〜0.2mです。なかには、柱根跡と思われる



写真4 第2調査区北 掘立柱建物1 (東から)

れる痕跡が見られ、柱穴の埋土から中国製青磁碗片、土師器片が出土しました。柱穴として浅いことから後世に削平を受けているものと思われる。(写真4)

掘立柱建物2 調査区北側にある、2間×3間の掘立柱建物です。柱間は、桁行で1.5～2.0m、梁行で1.5m、柱穴の直径は0.3～0.4m、深さ0.15～0.2mです。なかには、柱根跡と思われる痕跡が見られ、柱穴の埋土から土師器細片

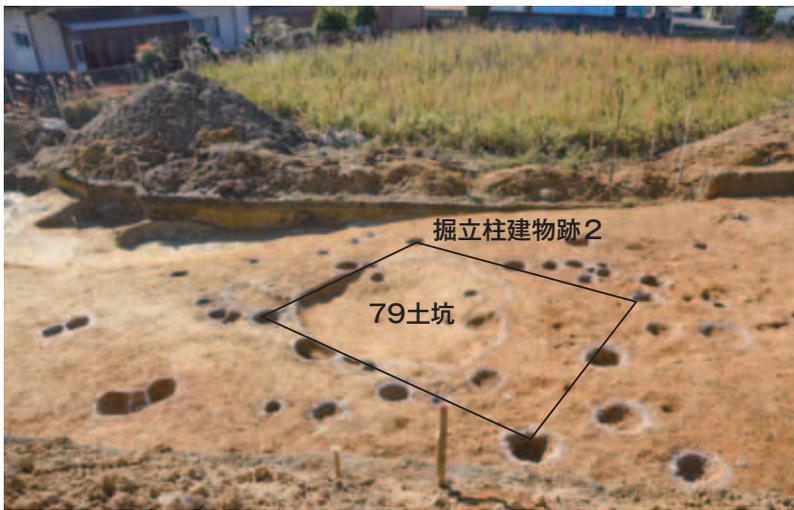


写真5 第2調査区北 掘立柱建物2と79土坑 (東から)

がごく少量出土しています。掘立柱建物1と同様に、柱穴として浅いことから後世に削平を受けているものと思われます。(写真5)

79土坑 調査区北側にある、レンズ状の窪みをもつ浅い土坑です。大きさは南北径2.6m、東西径2.7m、深さ0.15mです。拳大の川原石が中央部で多くみつかっています。土師器皿、土師器羽釜片などの煮炊具が底部で出土しました。鎌倉時代から室町時代ごろの遺構と思



写真6 第2調査区南 近世溝 (石積暗渠跡) (南から)

われますが、用途は不明です。

85土坑 調査区南側にある、平面形が円形の土坑です。大きさは南北径1.2m、東西径1.2m、深さ0.4mです。シルトが堆積し、原地形が高い北側から土砂の流れ込んだ様子が確認できます。中世末以降の平瓦が出土しました。

近世溝 調査区南側にある、南北方向に流れる溝です。本来は、中世の遺構面より上層から掘り込まれたものと思われますが、南北方

向の道によって上部が削平されたものと思われます。掘方幅0.5～0.8m、残存長17.2mです。人頭大の川原石の平坦な面を揃えて積んでいる部分が一部で確認されたことから、石積の溝であったと思われます。肥前系染付磁器片、瓦類などが出土しています。調査区を南北方向に走る市道・中21号線の下から検出され、この道は、遅くとも江戸時代後期にはあったと考えられ、その下が石積溝として使われていたものと思われる。(写真6)

遺物 中世の柱穴から中国製青磁碗や土師器、中世の土坑から土師器羽釜や皿など、遺物包含層から古墳時代の須恵器の坏や甕の破片、古代の布目瓦、中世の瓦類、中国製青磁碗の破片などが出土しました。

まとめ

今回の調査では、古代寺院関連に関する基礎や遺構などの確認が期待されていましたが、発掘調査の結果、明確な寺院跡と考えられる遺構は確認できませんでした。第1・2調査区において、中世以降の大規模な造成をして耕作地へと土地を改変した痕跡が確認できました。そうした造成土と耕作土から、中世の土師器や瓦器などの遺物や中世から近世

までの陶磁器や瓦が出土しました。また、古墳時代の須恵器坏・甕、布目のある平瓦などの中世以前の遺物も出土しています。このことから古墳時代以降の遺構がこの周辺にある可能性も出てきました。

中世以降の大規模な造成による耕作地などの土地利用を考える上で、貴重な調査成果を得ることができました。

また、寺院跡に関連するものとして布目瓦などの瓦類が遺物包含層などから出土したことは、近辺に寺院跡がある可能性は残されました。

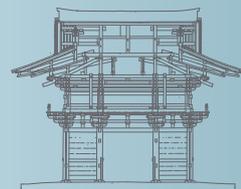
一方で、今回の調査地の第2調査区の南には、真言宗山科派の寺院である一乗山妙音院観音寺が近接しています。

この寺院では、紀の川市指定文化財である「絹本着色十一面観音立像図」を所蔵しています。室町時代に鎌倉時代の描法を用いて描かれたもので、色をおさえた彩色の上に、細かい截金を入れて重厚な色感を見せています。寺の境内には、円形の掘り込みをもつ礎石のような、大きな岩が安置されています(写真7)。古代の「尼寺観音寺」に所縁のあるものかもしれません。(田之上裕子)



写真7 一乗山妙音院観音寺門前にある礎石

参考資料
貴志川町史編集委員会編(1981)「貴志川町史 第三巻 資料編2」
貴志川町史編集委員会編(1986)「貴志川町史 第一巻 通史編」



尊勝院表門の保存修理

那智山青岸渡寺には、「尊勝院」と称される僧房跡が存在します。本堂の北側から那智の滝を望む、その眼線を足下へ落とすと、表門や庭、銅板屋根の建物群と、その境内が俯瞰できます（左下の写真）。

尊勝院は、かつて飛瀧権現（那智の滝）を管理していた那智山執行職が代々住した僧坊であった、と伝えられています。その境内は「中世行幸啓御泊所」跡として、和歌山県の史跡に指定されています。

表門は、2本の円柱とその前後に四角い柱を建てた「四脚門」という形式の門です。屋根面は、起りと反りのある「唐破風」と称する屋根を檜皮葺きで仕上げます。門の両脇に、同じく檜皮葺き屋根の袖塀・脇門が付属します。柱や桁、湾曲した垂木を含め軒先までを全てケヤキ材で作し、円柱の間にある棧唐戸もケヤキ材とされます。その垂木の上には、幅32cm、長さ2m、厚みは6mmと薄く仕上げたクス板をしながら張ってあることも確認できました。

昭和末頃の屋根葺替以来の今回修理は、



尊勝院境内の俯瞰（手前が表門）



尊勝院表門（棧唐戸を閉めた様子）

県史跡の保存活用整備事業として実施されています。今冬より素屋根の建設、檜皮屋根の葺替えと軒・小屋組の補修、袖塀の軸組修理、棧唐戸の修理等を行っており、今年6月上旬に竣工する予定です。

修理中には、小屋内で過去の修理棟札4種5枚を確認し、仕様や痕跡等の調査と合わせ、建物の来歴が概ね明らかとなりました。棟札で最古のものは元治元年（1864）、最近の棟札は昭和33年に表門で柱の根継ぎ修理や小屋組の改修を行った際の根継ぎ修理や小屋組の改修を行ったものでもした。従来は江戸初期の再建とも考えられていた現在の表門は、細部の様式等からみても、青岸渡寺本堂（天正18・1590年再建）が改修を受けた享保年間よりも後、江戸後期頃に再建（または大改

修）された建物と考えると良さそうです。

江戸末期の修理棟札には、「不開門并玄関屋欄（根）重葺」や「南貴（紀？）那智大瀧水中仁出現」等の文字列が確認されます（右写真）。先述の伝承や、天皇や皇族たちの熊野参詣時以外は棧唐戸が閉鎖されていたことを物語る内容でもありました。

県内の平唐門形式の四脚門は、紀州東照宮の唐門や高野山・普賢院の四脚門（いずれも重要文化財建造物）等も思い浮かべますが、軒高が3m近くになる当門も、負けず劣らぬ歴史と風格を備えた建物です。修理後には、那智の滝とともに傍からも見上げて貰えると、那智山の歴史をより感じ取って頂けるのではないかと思います。（下津健太郎）



元治元年の修理棟札

神社やお寺の建物を観察すると、正面の向拝柱の上端外側に佇む龍や唐獅子、象などの彫刻に出会うことができます。これは木鼻きばなと呼ばれ、柱をつなぐ虹梁や貫の端部を装飾したものです。大工彫刻が発達した紀州には、躍動感あふれる木鼻が数多く残されています。

一方近世の民家では、欄間に彫刻が入ることはあるものの、部材自体が装飾化されることはあまりないようです。しかし現在修理を進めている重要文化財増田家住宅表門（岩出市1712年）では、意外にも、馬屋として使われた部屋の中に木鼻を見出すことができます。表門は水田とのコントラストが印象的な、間口が27mにも及ぶ壮大な長屋門で、正面になまこ壁が配された質実剛健な印象の建物です。三頭分の馬屋には板床や天井が張られていることから、前回の解体修理時には農耕馬では無く、乗用馬のために用意された空間と推定されています。



増田家住宅表門全景



馬屋の差鴨居に施された木鼻

と、この部屋は紀州藩の役人用の厩うまやとして用意され、その格式を表現するために木鼻が施されたのかもしれない。

（多井忠嗣）

近年の研究により、山崎組大庄屋の屋敷である増田家住宅は、紀州藩が開削した紀ノ川上流の藤崎井堰いせきからの用水路を利用した、新田開発の要所であったと考えられています。想像をふくらませてみる

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

土石流とは、土や石が雨水などと一体になって渓流や斜面を一気に流れ下る現象のことです。土石流は台風や集中豪雨などによって発生する自然災害の一つで、令和3年7月に静岡県で発生した熱海市伊豆山土石流災害の土石流が街を飲み込む映像は、読者の皆様の記憶に新しいことと思います。河川に近い遺跡の発掘調査をしていると、そういった災害の痕跡を目の当たりにすることがあります。

令和3年6月から9月にかけて日高郡日高町小浦地内で当センターが小浦Ⅰ遺跡と小浦Ⅱ遺跡で実施した発掘調査では、東側の調査区2が現在の小さな川に隣接していました。発掘調査のため土を掘り進めていくと、調査区南半部では、現況の水田耕作土とその床土の下に大量の砂礫を含む土層が深さ1メートル以上堆積していることが明らかになりました。この砂礫層は、粘土と粗い砂を中心とし、直径3〜10cm大の丸い石で構成されており、土層の断面の様子から遺構面（昔の人が生活した地面）の上と下、2層に分けることができました。上層には土器などが少量出土するものの、下層からは遺物が出土しませんでした。

これらのことから、「人々が生活する以前」、元々川であったところにこの遺跡で大規模な土石流が発生し川が土砂で埋まってしまったため、現在の位置に川の流れが変わったと推測しました。その後、弥生時代後期から古墳時代にかけて人々がこの調査区周辺で生活をしていましたが、再度土石流が発生したと推測できます。

1m以上も石や泥が堆積している状況を目にする、自然災害の恐ろしさ、特に水というものが持つ力の大きさを感ぜずにはいられません。（瀨崎範子）



小浦Ⅱ遺跡調査区2 下層の土石流と見られる堆積（西から）

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2022年春～2022年夏)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 春期企画展「古代『紀伊国』の成り立ち～奈良・平安時代のわかやま～」
2022年3月19日(土・祝)～2022年5月8日(日)

和歌山県立博物館

- 企画展「和歌祭創始400年記念 和歌祭と和歌の浦」
2022年3月12日(土)～2022年4月17日(日)

高野山霊宝館

- 令和3年度平常展「密教の美術」 2021年12月4日(土)～2022年4月10日(日)
- 令和4年度春期企画展「鎌倉時代の高野山」 2022年4月16日(土)～2022年7月10日(日)

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、期間変更や中止となる可能性があります。
掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。



目次

- 1 表紙「鳩羽山と発掘調査地をのぞむ(南上空から)」
- 2 特集「尼寺観音寺跡の発掘調査」
- 6 文化建造物課 短信「尊勝院表門の保存修理」
- 7 きのかに歴史小話「増田家住宅表門 一木鼻が語るもの」
「土石流の痕跡」
- 8 催し物案内

風車98 (2022・春号)

令和4年3月31日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp/>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1
TEL 073-472-3710 FAX 073-474-2270
kanri-2@wabunse.or.jp



LINE公式アカウント

ID: @942tjyhk

